

令和2年度

福祉体験作文

コンクール

作文集



©しゃらんちゃん



弥富市社会福祉協議会

ごあいさつ

このたび、弥富市社会福祉協議会として五回目の実施となる福祉体験作文コンクールに、市内各校より多数の福祉体験作文をお寄せいただき、誠にありがとうございます。ありがとうございました。優秀作文を作文集としてまとめさせていただきますので、お手にとってご覧いただけると幸いに存じます。

さて、今年は、新型コロナウイルスの影響で、青少年ボランティア体験事業など、福祉に触れる機会が多く失われてしまいました。それでも、子どもたちは、『福祉』について、日常生活で見たまま感じたままを思い思いに記してくれました。

『福祉』というと難しく思われるかもしれませんが、困っている人を見かけたら声をかける、相手の事を思いやり、行動することも『福祉』といえます。この作文集は、その始まりともいえる体験を詰め込んだものとなっています。何をしたら喜んでくれるか、どうしたら役に立つかと考え、手助けし、「ありがとう。」と言われる。言われたことが嬉しくて、また考え、行動する。

きっかけは違えど、自分が行ったことで喜んでもらえるのは誰もが嬉しいと思います。

ただ、困っている人に声をかけるのはとても勇気が

必要だし、勇気を出して声をかけても、思春期の子どもたちの中では、その行動を冷やかすこともあるかもしれません。けれども、声をかけ動いたことで、相手からだけではなく、周りからも感謝されたり、褒められたり、「おっ、やるな。」と思われることもきっとあります。そして、その場面を見た他の子どもたちが、私も声をかけてみようかなと思うようになる。そんな連鎖が拡がり、この連鎖に、子どもだけではなく、大人も巻き込まれていけば、例えば、やりたい事も障壁があつてできないと感じる人に対し、ほんの少し手助けをするだけで、それを可能にできる機会が増える。そうなることで、弥富市はより良いまちになるのではないかと思っております。

このまちに住まう全ての人が、普段から自分らしく暮らす、それが当たり前の幸せとなるまちを目指して、この作文集が、多くの方の『福祉』への第一歩となることを祈っております。

結びに、作品を応募いただいた児童・生徒の皆さん、指導にあたられた先生方、ご家族の皆さまに深甚なる敬意と感謝を申し上げます。

令和二年十二月

社会福祉法人弥富市社会福祉協議会

会長 八木 春 美

令和二年度 「福祉体験作文コンクール」 作文集

・ 最優秀賞	強く生きるお姉ちゃん	栄南小学校 四年	伊藤 幸穂
・ 優秀賞	改めて感じる家族の大切さ	弥富中学校 二年	渡辺 小羽
・ 秀逸	本人がそう言うから	海翔高等学校 一年	勝野 結依
・ 秀逸	ぼくの大すきなおじいちゃん	栄南小学校 三年	佐藤 蓮
・ 入選	障がい者の気持ち	十四山中学校 三年	大羽 菜々美
・ 入選	誰もが平等な世界を目指して	弥富北中学校 一年	鈴木 友奈
・ 入選	私たちにできること	栄南小学校 六年	荒尾 怜花
・ 入選	ボランティア活動	日の出小学校 四年	鈴木 結円
・ 佳作	自分に出来る事	弥富北中学校 一年	中島 美冴
・ 佳作	人を助ける仕事	白鳥小学校 五年	永久 桜輔
・ 佳作	かんしゃの気持ち	十四山西部小学校 四年	勝見 壮良
・ 佳作	いろんなくふう見つけたよ	栄南小学校 三年	荒尾 彩華

☆最優秀賞☆

強く生きるお姉ちゃん

栄南小学校 四年 伊藤 幸穂

わたしのお姉ちゃんは、一才になる少し前に事故で、のうにしよう害を受けたと家族に聞きました。のうしよう害があると、体を動かすことがむずかしく、生きていくことが大へんだと分かりました。

全力で走った後の苦しいこきゅうのじようたいでいつも息をしていることや、木の根っこが水をすう音まです聞こえてしまうほどのうるさいかんきようの中で生きていくことをお母さんから教えてもらいました。わたしはその話を聞いてそんな大へんなからだで生きているなんて、強いなと思いました。

お姉ちゃんはストレッチャーがたで、ねたじようたいでもい動できる車いすに乗って動します。

お姉ちゃんは、いつもそばにいてくれる人がいます。さらに家族い外にもそばで手伝ってくれる人たちがいます。たとえば、お姉ちゃんのために、おふる屋さんが家に来てくれて、やさしく声をかけながらお姉ちゃんの頭をシャンプーしたり、体をあらったりしてくれます。そのときのお姉ちゃんは、すごうれしそうな顔をしていました。それを見て、わたしは、大へんだ

と思いました。こうして近くにいる人があるから、お姉ちゃんも生きていけるんだと思いました。お姉ちゃんは絵や詩をかくことが好きで、わたしに、イスの絵をかくてくれたことがあります。その絵には、こんな言葉もいっしょにくれました。

生きている

それだけしかしてあげれない
あなたにしてもらうばかりのわたし

いっぱいがまんさせちゃうね

大きな荷物を持って歩くあなたを

ささえてあげられない

今 くやしいという気持ちが生まれたよ

あなたが休むイスであらう せめて

あなたが泣ける 力をぬける

ゆつくり目を閉じていられる

イスでありたい

ありがとうさっちゃん

みんなにえ顔をつくつてくれて

お母さんをえ顔にしてくれて

ほんとうにありがとう

愛をつめて お姉ちゃんより

わたしはこの言葉を何回も読んで泣いてしまいました

た。

お姉ちゃんが絵をかくときは、お母さんにだっこしてもらい、うでを持ってもらって、人指しゆびにいろいろな色の絵の具をつけてかきます。わたしはお母さんを手伝って、絵の具を出したり、お姉ちゃんの指をふいたり、画用紙を取ったりします。わたしも何度かいつしよによりで絵をかきました。とても楽しかったです。

お姉ちゃんは、あいうえおの五十音が書かれたボードを指さして、お母さんとお話をします。でもわたしはまだお姉ちゃんと会話はできないけど、ちゃんとわたしを思ってくれる気持ち伝わります。いつも、早くなおっていつしよにお話をしたいと思っています。

わたしは、お姉ちゃんの足になって、いろいろなきれいな所や楽しい所、お姉ちゃんの好きな温せんにつれて行ってあげたいです。

わたしは、お姉ちゃんを通して、しょう害のある人の大へんさが分かったので、お姉ちゃんだけではなくしょう害のある人の手助けをしていきたいと思っています。



☆優秀賞

改めて感じる家族の大切さ

弥富中学校 二年 渡辺 小羽

私の家族は七人家族、四世帯です。家族構成は、私、父、母、弟、祖父、祖母、曾祖母で生活をしています。

私の曾祖母は去年の二月に、玄関で転んでしまい腰にヒビが入り、入院することになりました。それを聞いた時に正直すぐ治るの？と思い、すごく心配になりました。私の曾祖母は年九十二才と高齢です。以前祖母と話していた時に、高齢者は治りが遅いと言っていたことを思い出し、曾祖母がまた自分で歩けるのかと家族に聞いたことを覚えています。

曾祖母が入院した頃、ちょうどインフルエンザが流行っていたため、なかなかお見舞いに行けずに行きました。行けなかった理由としては、母のお腹の中には弟がいたからです。

それから少し経ち、インフルエンザも落ち着いたので父と母に連れて行ってもらい、お見舞いに行きました。その頃の曾祖母は環境が変わったためか、食事をあまり取っていないと聞きました。行った時間も遅かったため、あまり話もできませんでしたが、帰り際に「たくさん食べて元気になってね。」と声をかけ病室を後にしました。

それからお見舞いは二、三度しか行けませんでした。が、やはり食事はあまり取っていないと聞き、とても心配になりました。食事を取らないこともあって治りも遅く、入院も長引くことになりましたが、やっと退院することができ、すごく嬉しかったです。退院ができたのは嬉しかったのですが、そこからまた大変でした。リハビリの始まりです。今まで当たり前に生活していたことができないからです。トイレにお風呂と祖母母が手伝っていたのを今でも覚えています。その甲斐もあって曾祖母は元気に自分で歩けるようになりました。

ケガの事もあって、我が家には、今手すりが必要な所についています。私の祖父、父は物を作るのが得意なので、手すりも父が作り祖父と一緒につけてくれました。これで前よりは少し安心です。

それから、曾祖母はデイサービスに行くようになりました。最初は嫌がっていましたが、今では、平日毎日行っています。

初めに書きましたが、私の家族は七人家族。みんな毎日仕事に行ったり、子育てと大変です。曾祖母がデイサービスに行くことについても色々な話がありました。祖母が仕事を辞めて曾祖母の面倒を見るとか、母に見てもらうとか、正直私に何ができるのかすごく悩みました。そして、出た答えが、家族一人一人が協力してやれる事をやる事です。

平日はデイサービスの人が曾祖母を迎えに来てくれて家の中まで送ってくれます。家ではまだ生まれてばかりの弟がいる為、母が毎日家の事をしてくれています。母は皆が帰って来るまでに、掃除、洗濯、晩ご飯の支度をしてくれます。祖父母は、帰って来たらまず、母が作ってくれた晩ご飯を準備したり、病院に連れていったりしてくれています。私が出来る事は、学校から帰って母のお手伝いと弟の面倒を見る事です。最初はうまくいかない事も多かったけど、今では色々な事が出来るようになってすごく嬉しい事です。

私が体験した事をお仕事にされている福祉関係の人は、すごく大変なんだと私は思いました。私の曾祖母は今では自分で身の回りの事はほとんどできるようなになりましたが、それができない人の介護をする方が人手不足であるということを家族から聞きました。まだまだ知らない事だらけです。将来私も父、母を見ていく事になると思うので、今からでも少しずつ勉強していきたいと思います。今感じた事、できるようになった事は、今後も大切にして、弟だったり友達にも教えてあげたいです。

この一、二年で色々な事がありました。曾祖母の入院だったり、弟が生まれたりと心配な事だったり、嬉しい事だったりと振り返ってみて思う事はやっぱり家族って良いなって事です。時にはケンカもするけど、

何かあった時は協力し合えるし嬉しい事は分かち合えるからです。

今高齢者の方だったり介護を必要とする人が元気で笑って暮らせるのも福祉関係のお仕事をされている皆さんのおかげだと思います。これからも頑張ってください。私も人の気持ち分かり、寄り添える大人になりたいと思っています。



◎秀逸

本人がそう言うから

海翔高等学校 一年 勝野 結依

私のいところは自閉症です。インターネットで調べてみると、『自閉症児は、コミュニケーション能力に困難が生じる。自分の思いがかなわないと感情が大崩れする。じつと出来ないなどが特徴である。自分が興味を持った対象には固執するなどこだわりが強い。』と書かれています。まさに、その通りだと思います。

いとこは今年、中学生になりました。普通の中学校ではなく、特別支援学校に行くことを選んだそうです。伯母さんはどちらに入学させるべきか、悩んでいました。しかし、特別支援学校を選んだのは、いとこ本人だそうです。その理由には、いとこの両親も私達家族も皆が仰天しました。それは、「どうしてそっちがいいの?」という質問に対し、いとこがたった二言「ボーリング」「バス」と言ったからです。いとこはバスとボーリングが好きで、その学校はバス通学だったからです。さらに、学校を見学しに行った時にボーリングをさせてもらったのがきっかけで、その日から「こっちの学校がいい」と言い出したのです。伯母さんはギリギリまで悩んでいたけれど、結局「本人が、そういうから」と特別支援学校に行かせました。

『本人がそう言うから』私はこの言葉に賛成する一方で、行きたい理由がそんなに単純でいいのかと疑問と少しの不安がありました。私は今までいとこを見てきて、いろんな感情を抱いてきました。最初は嫌な気持ちです。いとこは、同じ小学校に通っていました。私が4年生の時、いとこが小学校1年生になりました。自分のいところが障害児であることを知られて、からかわれるかもしれないと思い、いとこのことが嫌いでした。しかし、いとこは私を見つけると嬉しそうに抱きついてくるのです。私は頭の中では、「可愛いな」という気持ちもあるものの心の中では、「可愛いな」という気持ちもありました。また、いとこがいじめられないかと心配もしました。

この年の運動会では、初めていとこと一緒に走ったので、嫌でした。リレーではいとこも走るのですが、他の1年生とは能力が全く違い、いとこの番で最下位になってしまうのではないかと、皆に迷惑をかけるのではないかと、いとこには走ってほしくなかったです。ところが、運動会本番、私の今までの思いが全部ひっくり返ったのです。私は嫌だなど思いながら、いとこが走るのを待っていました。ついに、いとこにバトンが渡り、私は思わず大きな声で応援していました。そして、何人かに抜かれ最下位になった時、私は気づきました。皆がいとこを応援してくれていることに。他の人の時とは違うすごく立派な声援でいとこは、無事に

ボタンをつなぎました。私はその時すぐ胸がぎゅーとなりました。

いとこのことをちゃんと認めてくれているように思っている。今まで障害のあるいとこを恥ずかしがっていた気持ちです。なくなりませんでした。今、その頃の事を考えるとかわいそうなことをしてしまっていたと涙が出ます。

この経験が私の『福祉を学びたい』という思いにつながったのかもしれませんが。そして今、私は障害者施設への実習のため、障害について勉強をしています。障害者だからと特別視するのではなく、障害“に關係なく、一人の人間として尊重することが大事だと学びました。そしてこの時、分かったことがあります。『本人がそう言うから』この言葉は本人の意志を尊重したものだということです。

いとこは今、毎日楽しみに学校に行っているようで、誰一人後悔していません。障害者であろうと障害児であろうと個人として尊重することは大切なことだと思います。

いとこは今でも私のことを大好きだと表現してくれています。私はその気持ちを絶対に裏切ってはいけなと思っています。私は自分の大切な家族を障害者だからと特別な子と見ていて、差別をしてしまっていました。

「私が悪い。しかし、そんな世の中で、そんな社会なのも悪い。」私はそう思っています。もつと優し

い人ばかりで、その障害者たちを理解し、受け入れてくれる社会になってくれたなら障害者の『障害者という障害』がなくなるのではないでしようか。障害者という個性であふれた人がもし近くに現れたなら、そのあふれている個性を『本人がそう言うから』と理解し、受け入れてほしいです。

◎秀逸

ぼくの大すきなおじいちゃん

栄南小学校 三年 佐藤 蓮

去年、おじいちゃんにびょう気が見つかりました。それで、海南びょういんに三カ月ぐらい入いんしました。

ぼくは、毎日おみまいに行つて、おじいちゃんに学校でべん強したこと、友だちのことなどいろいろ話しました。おじいちゃんは、にこにこしながら話を聞いてくれました。

ぼくは帰るときには、おじいちゃんにぎゅつとだきついて、早くびょう気がなおるようにとパワーをおくりました。

おじいちゃんのたいいんが決まったときは、ぼくはうれしくてたまりませんでした。

おじいちゃんが家に帰ってきました。おじいちゃん
は、少しはなれたところに住んでいるので、毎日おじ
いちゃんの家に行ってお世話をしました。

おじいちゃんのそばにいて、おじいちゃんの手を
握ることは、何でもしてあげました。

おじいちゃんは、びょう気のせいでだんだん元気が
なくなっていました。ぼくは、もっと元気になって
ほしいと思いました。

それからどんどん悪くなっていき、ねたきりになっ
てしまいました。ぼくは、おじいちゃんの手と足をマ
ッサージしてあげたり、まぐらのいちをかえたり、い
ろいろなことができることをいっしょうけんめいしていま
した。おじいちゃんは、いつもうれしそうに

「ありがとう。」

と言ってくれました。

しばらくしておじいちゃんは、がんばったけれど、
なくなりました。ぼくは、悲しくて悲しくてしかたあ
りませんでした。

ぼくの大すきなおじいちゃんはなくなっちゃけれど、
いつもぼくの心の中にいます。ぼくは、おじいちゃん
と何でもがんばることをやくそくしました。だから、
これからどんなことでもがんばっていききたいと思いま
す。

〇人選

障がい者の気持ち

十四山中学校 三年 大羽 菜々美

私は昔、障がい者がとても苦手だった。差別的な表
現になってしまいかもしれないけれど、不気味な感じ
がして怖かった。でも、今思うと、大変失礼なことを
思ってしまったと感じるし、思ってしまったことに後
悔も残る。だから今、昔の私みたいに障がい者につい
て悪いイメージを思っている人がいるなら、私の体験
談を読んで何か少しでも感じてもらえたら良いと思
う。

新型コロナウイルスが流行る前、祖母の母である”

ばあば”が入院した。病院にお見舞いに行つて帰る時、
病院の廊下で小さな男の子とぶつかってしまった。私
はかがんで男の子に

「ごめんね。」

と言ったけれど、その言葉は男の子の耳に届いてい
ないように感じた。だから、今度はジェスチャーも付け
て

「ごめんね。」

と言ったら、小さな手で親指を立てて笑ってくれた。
このとき私は、伝わって良かったという気持ちと同時
に男の子は何か耳に障がいを持っている障がい者だと
も察した。次の日もばあばのお見舞いに行った。ばあ

「かわいそうなんかじゃないと思うんだ。だって、耳が聞こえないだけで、その他は私達と一緒に。耳のせいであつて、こつと不器用になつたり、コミュニケーションが難しくコミュニケーションが難しくなつたりすると思ふけど、その試練を一生懸命乗り越えようとする姿は、とてもかつこいと思ふんだ。少し私達と違う何か悪いイメージを持つてしまつたりするけれど、悪いイメージを持たれてしまつた人は、とても悲しむと思ふし、自分が生まれてきてしまつたことを後悔してしまふかもしれない。私も、何か障がいを持つていて悪いイメージを持たれたと考えただけで胸が苦しいもん。あなたもそうでしょ。」

私は、今流行っている新型コロナウイルスで苦しんでいる人達に対して、誹謗中傷の言葉を投げている人達がとても滲めだなと思った。この文章を書いたところで全員が誹謗中傷の言葉をやめるとは言えないし、それは本人しだいだなと思う。でも、一人でもいいから、人をけなすような言葉を使わなくなしてほしい。そう思った時に、この体験を思い出した。もちろん、ちゃんとお話は覚えていたけれど、このお話を見て、

聞いてくれた人の心に何か届いていたらいいなと感じるし、これから障がい者の方を見たとき、かわいそうだなと思うのではなく、かつこいいなと感じてほしい。

〇人選

誰もが平等な世界を目指して

弥富北中学校 一年 鈴木 友奈

私は、様々な福祉体験を通して、日本の福祉は他国と比べて遅れていると考える。点字ブロックやスロープなど、たくさん設置されているのに、なぜ？そう思った人もいるだろう。確かに、言わば『物のバリアフリー』の設備は整っている。しかし、それだけで誰もが住みやすい環境になっていると言えるのだろうか。

例えば、点字ブロック。私も、駅などでよく見かけるのだが、時々、その上を健常者が歩いている。たとえば障がいがないくても、点字ブロックの上を歩いてはいけない。このように、せっかくの設備が台無しになっている。福祉への関心、正しい知識の認知、障がい者への理解。これらが低いのが、遅れていると考える理由であり、日本の福祉の一番の問題だと思う。

デンマークやスウェーデンでは、地域包括ケアシステムという地域全体で高齢者を支える仕組みがある。日本も、ある一部分の人たちだけでなく、私たち一人

一人が関わらなければならぬ。福祉と言われても、よく分からない人がいるだろう。難しいと思う人も多いだろう。でも、身近なところに、福祉はたくさんある。点字、点字ブロック、優先席。駅や電車だけでも、これだけある。

まずは、簡単なことから始めてみよう。電車で、助けが必要な人がいたら、席をゆずる。街中で困っている人がいたら、「大丈夫ですか。」と声をかける。こうしているうちに自然と関心が出てくるだろう。

外見から分かる人はもちろん、外見からは分からないけども助けが必要な人も多くいる。そんな人たちを見ただけで分かるように、マークがある。例えば、ヘルプマーク。義足や人工関節、内部障害、妊娠初期の人達が持っている。使っている人は二十%いるのに対し、知っている人は四十七%と知らない人の方が多い。認知度が低いのがゆえにヘルプマークをつけて街中を歩いていた女性がこんな被害にあっていたことをツイッターにツイートした。ヘルプマークをつけて外出したら「頭のおかしい人が持つやつ。」と言われ泣いてしまった。女性は、すれ違った幼い子どもをつれた若い母親に「なにあれ。頭のおかしい人が持つやつ？近寄ったらダメよ。」と言われたそう。このツイートに対する返信で、「私も、そんなの持つて同情されたいの？と言われた。」「三年つけてるけど声をかけてもらったことがない。」といったツイートがあった。外見からは見え

ない障害を持つている人にとって、一人で外出する時の『お守り』のような存在のヘルプマーク。そのヘルプマークをつけていると逆に心ない言葉を浴びせられたりすることからも、認知度の低さと正しい知識の無さがうかがえる。

そして、いちばん難しい問題が、障がい者への理解だ。障がい者というだけで差別されたり、心ない言葉を浴びせられたり、いやな目で見られたりすることは、残念ながらもまだある。

では、どうしたら減らすことができるだろう。それにはまず、大変さを理解することが必要だ。私も、福祉実践教室を体験するまで分からなかった。街中で車いすの人を見ると、座っていられて楽そうだと思っていたので、車いすの体験をした。実際にやってみると、うでの筋肉をたくさん使い、終わった時にはヘトヘトだった。私は、その一時間のほんの何分かしか車いすに乗らなかった。しかし、車いすの人は、一生そうしていなければならない。その日から、私は障がい者を差別的な目で見なくなり、席もゆずるようになった。

もう一つ、障がい者に対する偏見を減らすことだ。私たちの心の中に、「障がい者は自分よりできない所があるから自分より劣っている。」という気持ちが少なからずあるという人もいるだろう。できない事があるから劣っているのだろうか。そもそも私たちよりできないことが多いのだろうか。いいえ、そんなことはあり

ません。目の見えない人は、私たちより指先の感覚が鋭く、点字が読めるし、耳の聞こえない人は手話ができる。できない所があるから、人より優れている所がある。その人それぞれメリット、デメリットがあるからこの世界が成り立つ。

心のバリアをなくし、障害を個性として受け入れ、誰もが平等な世界を目指して。

〇入選

私たちにできること

栄南小学校 六年 荒尾 怜花

「おはようございます。」私はいつも、通学路で高れいの方を見かけると、そうあいさつします。私があいさつをする、笑顔であいさつを返してくれて、とても気持ちがよく、うれしい気持ちになるからです。

私は最近、身の回りなどに、高れい者が増えていることを感じます。病院や出かけ先、近所でも、高れい者をよく見かけます。また、一人で住んでいる高れい者も多いと、テレビで見たことがあります。生活で困ったことがあったらどうしているのか、一人で生活していて、さみしい思いをしないのかなと、気になりました。

私の祖父は、今年の初めに脊柱管狭窄症という病氣

で歩けなくなってしまうたので、手術をしました。この病気は、長く歩くと足がつかれて休まないと歩けない、足がしびれてしまうというしう状の病気です。手術をした後は、とても痛そうにしていました。その後、リハビリ病院に転院して、作業療法や理学療法にはげみ、今ではつえをついて歩けるほどになりました。祖父が入院している間、私は家族とお見まいにいつてはげましたり、移動をするときに、車いすをおしたりしました。とても喜んでくれたので、少しでも役に立つことができて、とてもうれしかったです。今では元氣になりましたが、これから体調をくずしてしまったり、つらそうにしていたら、積極的に声をかけてあげたり、手助けをしてあげたいです。

また、私は五年生のときに、学校の福祉体験教室で、車いすの体験や点字の体験をしました。車いすの体験では、人を車いすに乗せて、車いすをおす体験をしました。人を乗せるときも降ろすときも、段差があると、乗っている人を気づかうことが大切だと教えていただきました。祖父の車いすをおすときに、この体験があつたので上手におすことができました。今後、車いすをおす機会があつたら、乗っている人を気づかえるようにしたいです。点字の体験では、点字についてのお話を聞いたり、点字をうつ体験をしました。点字を読むときは、手でさわって読むので、大変ではないのかと思いました。でも、目の不自由な人にはとて

も便利なものだと知りました。私は、点字の体験をして、点字のことについてもっといろいろなことを知りたいと思いました。

私が考える福祉とは、高い者などの体の不自由な人に、私たちの力で少しでも幸せになってもらうことです。そのために、私はあいさつすることなどから始め、実際に体験教室に参加したり、福祉についての本を読んだりして、福祉について知ることが私たちにできることだと考えました。

〇人選

ボランティア活動

日の出小学校 四年 鈴木 結円

わたしの身のまわりには、しょうがいをもっているこまっっている人や、助けを求めている人がたくさんいます。

わたしは、あるニュースがきっかけで、こまっっている人や助けをもとめている人を助けようと思いました。そのニュースとは、山の中でまい子になっていた小さい子を、ボランティアさんが見つけたというものでした。わたしは、この人すごいなと思い、ボランティア活動について考えてみました。

最近は、九州の方で大雨がふって川がはんらんしたり、どしやくずれがおきたりして大へんなことになっています。そのときにも、ボランティアの人たちがたくさん集まって、大雨でこまっている人たちのために働いていました。ボランティアを行う人たちは、こまっている人たちを助けたいというやさしさが、いつばいつまった人たちなんだなと思いました。

たとえば学校でも、登校するときに見守ってくれているスクールガードさんがいます。スクールガードさん達は、十年ぐらい前から、雨の日も風の日も毎日ずっと見守ってくださっているそうです。やさしい笑顔で「おはよう。」と声をかけてもらうと、みんな元気になるります。だから私達の安全をいつも見守ってくださっているスクールガードさんには、感謝の気持ちでいっぱいです。

このように、ボランティア活動には、登下校の見守りや被災地での交流活動、ふれあいなどいろいろな取り組みがあり、みんなで社会をささえているような気がしました。そして、私もその社会の一員として、ふだんのくらしを幸せにするお手伝いをしたいと思いました。

だからこれからは、ごみを拾う活動にさん加したり、こまっている人や手伝いをしてほしい人に教えたり助けたりしてあげたいと思います。そうやって、小さなことから始めて、少しずつ地いきのためにやくにたて

たらいいなと思います。初めはほんの小さなことでも、みんなで合わせれば、助け合うやさしい心がたくさん広がると思います。そして、小さな子どもからお年よりまで、全ての人が幸せとを感じる社会にしていけたらいいなと思います。

【佳作】

自分に出来る事

弥富北中学校 一年 中島 美芽

私は、この作文を書くにあたって、福祉について調べてみた。福祉とは全ての人の幸福を意味する。そして福祉の語源についても調べた。すると、『福』は幸せという意味、『祉』は幸いという意味だった。私はこの『福』と『祉』には、両方『幸せ』と関連するということに気が付いた。

これは、私が体験した事。私が保育所の年長の時、福祉に関する行事に参加した。その時に、おじいさん、おばあさん達の前で昔ながらの歌や簡単にできる手遊びなどをひろった。歌を歌うと笑顔で楽しそうに手を叩いたり手遊びをマネしてくれたりしたことを今でも覚えている。でも、年長の時はまだ、『福祉』という難しいことをもちろん考えたことがなかった。その時は、おじいさん、おばあさん達、うれしそうだなと思

っただけだった。

しかし今、思い返すと小さい子ども達が私達が小さい頃に歌っていた歌を歌ってくれている。と思つてにっこり笑ってくれたんだと思う。

そして、年長の時から二、三年たった頃、私が通っているピアノ教室で先生に、老人ホームのボランティア活動に参加しない？と聞かれた。その時先生は、歌を歌ったりピアノを弾いたりするよ。と言っていた。その時、私は、おじいさん、おばあさん達の前でピアノをひろうしたいなと思った。だから、参加することを決めた。

そして、当日私は、とても緊張していた。ある歌に合わせて、おじいさん、おばあさん達の肩を揉んだり、叩いたりした。すると、終わった後に、おばあさんが「ありがとう」

と言ってくれてとてもうれしかった。おじいさん、おばあさん達は、リズムに合わせて、手を叩いたり、一緒に歌を歌いながら、にっこりと笑ってくれた。その笑顔を見たら心がほっこりとした。

福祉について調べた時に、一つ気になる単語があった。それは、『心のケア』だ。私はこの単語についても調べた。

『心のケア』とは、危機的出来事などに、そうぐうしたために発生する心身の健康に関する多様な問題を予防すること、あるいは、その回復を援助する活動の

ことを言うそうだ。そして、『心のケア』を行うには、人間の心身の回復を援助する方法について正しい知識を持つこと、人間の心を大切にするという心構えが必要だ。と記載されていた。

この『福祉』について自分ができることはないか、考えてみた。私は直接何かをするのではなく、気持ちで伝えたり、心と心がつなぐとよいと思った。そして、どこかへ出かけた時に誰かが困っていたら、声を掛けたりして、助けてあげられたら、助けたいと思った。

私の身近で、出来ることについても考えた。私の家の近くには、みんなが使用する公園や集会所などがある。そこで私は、公園の掃除をしようと思った。しかし、私に出来る事は、公園の中に生えている草などを採る事ぐらいしか出来ない。でも、それをするだけでも、生えている草などで、手や足をケガすることが減ると思う。集会所は、常に鍵が閉まっっていて部屋の中は掃除が出来ないけど、玄関の前を掃除したり、草むしりをする事なら、私にも出来ると思った。

この作文を書いて私は考えた。目や耳の不自由な人は、何をしてくれたら喜ぶのかなと。そこで、目の不自由な人は、何をしてくれたら喜ぶのか調べてみた。すると、いつもと違う事が起きた時には、誰かに声を掛けてくれるとほっと安心するそうだ。

これから、生活するにあたって、障害のある人や高

齢者に、積極的に声を掛けて、安心させてあげたり、困っている人がいたら、助けてあげたいと思った。

【佳作】

人を助ける仕事

白鳥小学校 五年 永久 桜輔

ぼくは福祉について最初は、何も思ってませんでした。でも、それは今、とても大切だと思っています。どうしてかという、福祉とは、日本にいる人全員に最低限の幸せをとけることだからです。

ぼくは、お父さんとお母さんが、福祉に関わる仕事をしています。そこは、老人ホームです。ぼくは、なぜお父さんとお母さんが老人ホームで働いているのか聞いてみました。そして、こういいました。二人とも、声を合わせて、

「どんな人でも、楽しく、幸せにくらししてほしいからだよ。」

といていました。

ぼくはそれを聞いて、どんな人とは、どんな人だろうと思いました。ぼくは、ぎもんに思っ、老人ホームやかいごしせつにいてみました。

そしたら、いろんな人がいました。手がない人、指がない人、足がない人、車イスの人、いろんな人がい

ました。ぼくは、こんな人たちがいるんだと思いました。その人たちは、とうぜん、1人では、何もできません。なので、てつだっていました。お父さんとお母さんは、こんなむずかしいことをたくさんやっていて、すごいなと思いました。

それぞれのねる部屋にはいろんなボタンがありました。トイレにつれていってもらうボタンやこまった時にきてくれるボタン、他にもたくさんボタンがありました。このように、手がない人や足がない人でも、みんなびょうどうに幸せにくらせる事が分かりました。ぼくが足や手がない人の立場だったら、ぜったいに幸せに生きていけないと思いました。ぼくは、自分や家族や知り合いだけが幸せだったらいいと思っ、ただ、地球にいて、今は、その考えはありません。なぜなら、地球にいる人、全員が、幸せに生きてほしいという気持ちがあるからです。

今は、コロナウイルスで福祉ができない所があるかもしれません。なので、ぼくはしょうらい人がこまっている時は、人を助けれる、りっぱな大人になりたいと思いました。

【佳作】

かんしゃの気持ち

十四山西部小学校 四年 勝見 壮良

ぼくは、スーパーマーケットに行った時の事について話します。

この時は、お母さんと行きました。中には、いつもの人がいました。中に入ったら、お母さんが買い物カゴをわすれていました。すると、お母さんが「とつてきてくれる。」とぼくに言いました。ぼくは、入口にカゴを取りに行きました。入口には、カゴが一こありました。ぼくの後ろには、おばあさんがいました。そのおばあさんは、カゴを持っています。おばあさんは、は、おばあさんにカゴをわたしました。おばあさんは、えんりよして「ぼくが、使いなさい。」と言いました。そして、ぼくが最後のカゴを使いました。でも、このスーパーマーケットには、二つ入口があるので、ぼくがもう一つの入口に行つてカゴを取りに行つておばあさんにわたしました。すると、おばあさんはぼくに「つこりとして、」ありがとう。ぼく。」と声をかけてくれました。その後、おばあさんは、にっこりとして、スーパーマーケットの中に入つていきました。ぼくは、気持ち良かったです。ぼくのやさしさがいろいろな人につながつていくといいなと思いました。

他には、歩いていたら時、おばあさんが荷物を落とし

てしまいました。おばあさんは、つえを持っていました。ぼくは、おばあさんに「手伝いましょうか。」と言つておばあさんの手伝いをしました。おばあさんは、「ありがとうね。」と言つて帰つていきました。ぼくは、うれしくなりました。ぼくは、おばあさんに「お元気で。」と言いました。おばあさんは、えがおで帰つていきました。

ぼくが一番かんしゃしているのは、スクールガードさん達です。ぼくたちの学校の登下校の時、ぼくたちといっしょに歩いてくれます。暑い日も寒い日も大雨の日もいっしょにぼくたちと話をしながら歩いてくれます。やさしいです。

スクールガードさんがいてくれるから、ぼくは、安心して帰れます。朝早いのにぼくたちと歩いてくれる時もあります。いつもにっこりとして歩いてくれます。ひがさをさして歩いてくれる人もいたり、「足がいたい。」と言いながら歩いてくれる人もいます。本当に、ぼくも一年生になる弟もお父さんもお母さんも、かんしゃしています。

おじいさん、おばあさん、これからも元気でいてください。これからも、ぼくたちのことをよろしくおねがいします。

ぼくも、いつも助けてもらっているのです、こまっっている人がいたらお手伝いできたらいいなと思います。

【佳作】

いろんなくふう見つけたよ

栄南小学校 三年 荒尾 彩華

わたしは出かけたときに、人にやさしいいろいろなくふうが町の中にあることにきがつきました。

たとえば自動はん売きです。車いすのひとでも、使いやすいように、のみ物に番ごうがついていて、その下に番ごうのついたボタンがありました。

トイレも使いやすくなっています。中はふつうのトイレより広くて、てすりが、ついていました。

えきに行ったときにもくふうを見つけることができました。スロープがありました。スロープは、車いすの人や、ベビーカーを使う人のためにあるそうです。点字ブロックもありました。点字ブロックは、目が不自由な人のためにあるそうです。

スーパーマーケットに行くときは、しょうがい者用ちゆう車場があったのに気がつきました。入口の近くにあり、のりおりしやすいように、広めに作ってあるそうです。町の中に、だれもが、使いやすいように、くふうがたくさんあって、びっくりしました。

家の中も見つけました。それはシャンプーとリンスです。シャンプーの容きに、ギザギザがついていました。目をつぶったときにも、使いやすいようになっています。お金にもありました。千円、五千元、一

万円のおさつには、さわって分かるようにしるしがついていました。

わたしたちの身の回りには、しょうがい者の人や、お年よりの人、小さな子どものために、いろんなくふうがしてあることが分かりました。わたしは、これから、だれもがつかいやすい物にするため、どんなふうにしたらいいか考えられるようにしたいと思います。



～社会福祉法人弥富市社会福祉協議会～

地域での人と人とのつながりを大切に、住み慣れた地域で安心して暮らせる「福祉のまちづくり」を目指して地域福祉活動を推進する団体です。

＜事業内容＞

- 弁護士による法律相談、民生委員・人権擁護委員等による心配ごと相談
- 結婚相談、婚活パーティーの企画立案
- 車椅子等貸出事業
- 生活福祉資金や小口資金の貸付
- ボランティアセンター事業（ボランティア活動の相談、ボランティア情報の提供、ボランティア活動保険の加入受付、青少年ボランティア体験学習事業の実施等）
- 各種団体活動の支援協力（福寿会連合会、遺族会、子ども会、身体障害者福祉会、ひまわり会、ボランティア連絡協議会等）
- 80歳以上の方を対象とした「敬老会」の開催
- 結婚50周年を祝う「金婚式」の開催
- 戦没者を偲ぶ「戦没者追悼式」の開催
- 共同募金配分金事業
 - ・ひとり暮らし高齢者対象「ふれあい昼食会」の開催
 - ・障がい児・者対象「機能回復訓練」の開催
 - ・母子・父子家庭対象「社会見学(体験学習)」の開催
 - ・市内学校で「福祉実践教室」の開催
 - ・ボランティア活動育成
 - ・災害ボランティアセンター事業
 - ・歳末たすけあい募金事業「福祉映画会」の開催
- なでしこ指定居宅介護支援事業所の運営（ケアプラン作成等）
- なでしこ指定訪問介護事業所の運営
 - ・訪問介護（高齢者、障がい児者宅にホームヘルパー派遣）
 - ・自費ホームヘルプサービス（介護保険外サービスの提供）
- なでしこ指定障害者相談支援事業所の運営（障がい児・者相談サービス利用計画作成等）
- 生活自立支援センターの運営（生活困窮者自立支援事業）
- 成年後見事業（弁護士による成年後見相談、成年後見普及啓発事業）
- 日常生活自立支援事業（軽度認知症、知的障がい者等の金銭管理）
- 「チャレンジハウス弥富」（就労継続支援B型）経営
- 「地域活動支援センター十四山」経営

弥富市社会福祉協議会基本理念

“や” やさしさにあふれ

“と” とともに生き

“み” みんなでつくる魅力あるまちの

“ふ” ふだんの

“く” ぐらしの

“し” しあわせ



©しゃらんちゃん

【お問合せ】社会福祉法人弥富市社会福祉協議会

<http://www.shakyo.or.jp/hp/1069/>

〒498-0021 愛知県弥富市鯛浦町上本田 95 番地 1 E-mail: yatomi-shakyo@clovernet.ne.jp

社会福祉協議会事務局 TEL0567-65-8105 なでしこ指定訪問介護事業所 TEL0567-65-8106

弥富市共同募金委員会 TEL0567-65-8105 なでしこ指定居宅介護支援事業所 TEL0567-65-8001

生活自立支援センター TEL0567-65-8105 なでしこ指定障害者相談支援事業所 TEL0567-65-3724

FAX（共通）0567-65-8002

チャレンジハウス弥富 TEL・FAX0567-65-8008

〒490-1413 愛知県弥富市子宝六丁目 80 番地 E-mail: yatomi-shakyo-j@clovernet.ne.jp

地域活動支援センター十四山 TEL0567-52-3425 十四山居宅介護支援事業所 TEL0567-52-3800

FAX（共通）0567-52-3811



この冊子の一部は、愛知県社会福祉協議会の『福祉でまちづくり総合推進事業助成金』により作成しております。